

大学の世界展開力強化事業(平成27年度採択) 上智大学、南山大学、上智大学短期大学部 取組概要

【事業の名称】(選定年度27年度・主たる交流先(中南米))

人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム

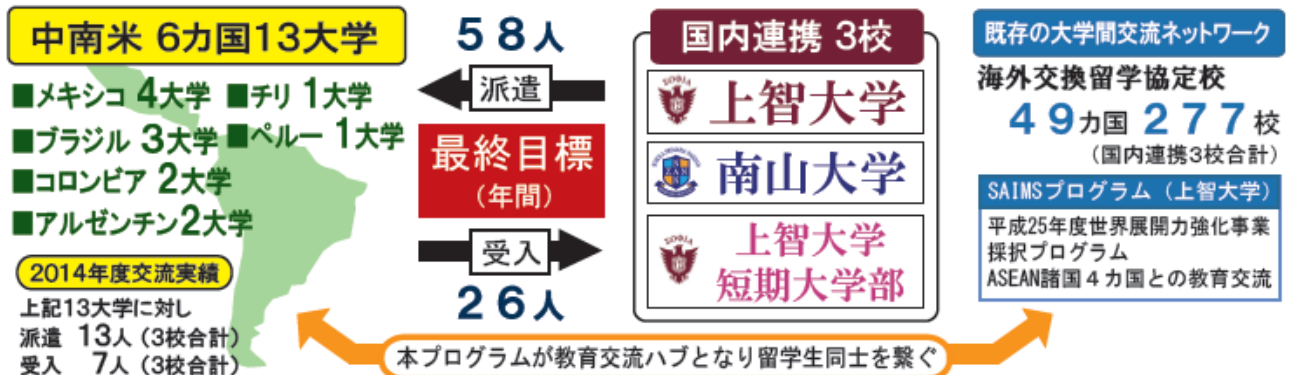
【事業の概要】

本事業は、カトリックの精神を共有する上智大学、南山大学、上智大学短期大学部が、中南米諸国との間に築いてきた教育研究両面での実績を基盤に、「人の移動と共生」をテーマとし、自らの学問分野に立脚しながらも、多角的な視野で問題の解決に向けて協働できる人材の養成を目指す。相手国の言語や文化の修得のみならず、インターンシップやサービスラーニング、フィールドトリップ、日系人社会を対象とした教育実践などによる多層的な教育・研究活動を行う。これらのプログラムをとおして、文化背景を異にする人々が共に生き、働く場で生じる様々な問題を①発見する能力、②問題から課題を設定する能力、③その課題を解決する能力を養成する。

【交流プログラムの概要】

中南米へは、上智からは6カ国13大学、南山からは3カ国4大学へ、交換留学生を派遣する。学生は留学の前後に受入派遣学生共通のプログラムに参加し、留学先では各国の語学科目や専門科目を履修するとともに、現地日系企業等でのインターンシップやボランティア活動を体験する。また、短期プログラムでは、上智、南山、上智短大の学生が参加するペルー・スタディツアーを実施し、上智短大が秦野市で学習支援を行っている日系市民の出身地域を訪ねることで、国際理解を一層深める。

受入学生には、国内マルチキャンパスによる教育を提供する。基本モデルコースでは①南山(名古屋)にて日本語集中講座やインターンシップに参加、②上智(東京)で専攻分野に応じた学部・研究科に所属し、コースワークを学修する。その上で、受入・派遣学生共通プログラムとして、中南米と日本の学生が共にスペイン語ないしポルトガル語で学ぶ「日本・ラテンアメリカ比較演習」や、産官学の研究者が多様な視点から問題提起を行うアクティブラーニング科目「人の移動と共生」、企業や学校でのインターンシップやサービスラーニングを提供する。学生の流動性を高めるために、交流プログラムは複数の受入時期と期間を設定する。



【本事業で養成する人材像】

「人の移動と共生」を軸に、日本と中南米諸国、さらには世界に共通する課題(多様性、社会的格差、文化摩擦等)に対する理解を深め、自らの学問分野に立脚しながらも、多角的な視野で問題の解決に向けて協働できる人材

【本事業の特徴】

本事業は以下の4点を特徴としている。

- 1) 国内連携3大学と中南米諸国が「カトリック精神」を共有していること。
- 2) 上智・南山・上智短大の「3大学マルチキャンパス」を舞台に展開されること。
- 3) 様々な形態のインターンシップ、フィールドトリップを通じて「産業界、地域社会との連携」強化を図るものであること。
- 4) 多様な背景を持つ日本人学生と留学生を結びつける「多層的な交流プログラム」であること。

【交流予定人数】

	H27						H28						H29					
	A	Br	Ch	Co	M	Pe	A	Br	Ch	Co	M	Pe	A	Br	Ch	Co	M	Pe
学生の派遣	0	0	0	0	1	14	2	3	1	12	6	18	2	6	1	13	7	19
学生の受入	0	0	2	0	0	2	3	3	1	2	7	3	2	4	1	5	9	4
	H30						H31											
	A	Br	Ch	Co	M	Pe	A	Br	Ch	Co	M	Pe						
学生の派遣	2	6	1	13	10	21	2	6	2	15	11	22						
学生の受入	2	4	1	4	11	4	2	5	1	4	10	4						

A: アルゼンチン Br: ブラジル
Ch: チリ Co: コロンビア
M: メキシコ Pe: ペルー

取組内容の進捗状況(平成27年度)

【事業の名称】人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム (選定年度27年度・主たる交流先(中南米))

■ 交流プログラムの実施状況



〈ペルースタディツアー〉

【派遣】

平成27年度の派遣人数目標15人を達成した。長期交換留学と短期プログラムを実施した。新規開講の短期プログラム、ペルースタディツアーでは、上智大学、南山大学、上智大学短期大学部の3大学から13名の学生が参加し、ペルーカトリック大学で中南米の文化や歴史に関する講義を受講した他、現地学生との交流、マチュピチュ遺跡等のフィールドワーク、現地日系人コミュニティや小学校を視察し、本事業のテーマである「人の移動と共生」を様々な視点から考え、理解することができた。

【受入】

平成27年度の受入人数目標4人を達成した。南山大学では本事業受入学生のための短期日本語集中コースを新規開講し、受講後に上智大学へ移動して専門科目を学ぶという国内マルチキャンパスの取り組みが確立した。日本語集中コースでは専従の講師を採用し、きめ細かな日本語教育および指導を実践すると共に、インターンシップの機会を提供した。インターンシップでは日本語学習の成果を実地で活用するとともに、文化背景を異にする人々が共に生き、働く場で起こる様々な問題を理解する機会を得た。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

上智大学と南山大学から教皇庁立ペルーカトリック大学に交換留学生として2名を派遣した。また、短期プログラム「ペルースタディツアー“往還する南米日系人”」では、上智大学、南山大学、上智大学短期大学部の3大学から13名の学生を教皇庁立ペルーカトリック大学へ派遣した。

○ 外国人留学生の受入

2月に南山大学の日本語コースに4名の学生を日本語集中コースに受け入れた。この4名は平成28年4月から上智大学に移動し、自らの専攻分野等での学修を行っている。

	H27												
	計画						実績						
	A	Br	Ch	Co	M	Pe	A	Br	Ch	Co	M	Pe	
学生の派遣					1	14							15
学生の受入			2			2		1	1	1	1		

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

相手大学13校のうち、既に協定を有する9大学とはさらに連携強化を図るとともに、未締結であった4大学とも交換留学協定を締結した。3月17日には中南米7大学から関係者を招き、プログラム開発協議会を上智大学で開催し、本プログラムに期待される役割についての議論を深めた。



〈3月18日 キックオフシンポジウム〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

上智大学及び南山大学は本事業専従嘱託職員1名を新規雇用し、南山大学は加えて特任講師1名を採用した。専従職員が学生への説明会の実施、リーフレットの作成、派遣及び受入学生の対応、連携大学担当者との連絡調整、協定校への出張など準備にかかる業務全般を担うことで、プログラムの運営体制を整備することができた。南山大学では日本語集中コース専従の講師を採用したことで、留学生に対しきめ細かな日本語教育および指導が実践できた。また、2016年度に上智大学において新設する、受入・派遣学生共通科目「人の移動と共生」等の準備を進め、受入・派遣両方の学生同士が継続的な交流を促進する仕組みを構築した。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況 情報の公開、成果の普及

本事業に関わる特設ウェブサイトとパンフレットを作成・公開し、事業の目的・内容等の詳細情報を広く公開した。3月18日には「実りある日本＝ラテンアメリカ学生交換推進プログラムをめざしてー“グローバル化”の中で“尊厳ある社会”を築くためにはー」をテーマとした国際シンポジウムを上智大学で開催した。中南米の連携大学より講演者2名、パネリスト1名、ゲスト4名が参加した他、インターンシップ連携企業や中南米各国大使館等から幅広い参加者を得た。

■ 特記すべき事項等

3月17日に外部有識者を招いて、「国際協働教育評価協力者会議」を開催し、事業の成果を評価すると共に改善点と継続的発展のための助言を得た。高等教育の質保証の専門家、国際機関や民間企業で中南米に関わる専門家とともにプログラム成果の振り返り、プログラム運営の課題や継続的発展について議論を深めることができた。また、外部有識者とともにプログラムを客観的に評価することで、今後の事業の改善につなげる知見を得た。

2. 取組内容の進捗状況(平成28年度)

【事業の名称】人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム
(選定年度27年度・主たる交流先(中南米))

■ 交流プログラムの実施状況【派遣】



〈ハベリアーナ大学スペイン語集中コース〉

長期交換留学と短期プログラムを実施し、計37名を派遣した。短期プログラムは、教皇庁立ハベリアーナ大学でのスペイン語集中コースを新規開講し、上智大学から4名、南山大学から4名、計8名が参加した。上級レベルのスペイン語研修のみならず、フィールドトリップ、世界遺産への宿泊研修、教皇庁立ハベリアーナ大学の学生との交流活動を行い、参加学生はスペイン語運用能力向上にとどまらず、コロンビア文化への理解・関心を深めた。

【受入】

平成28年度の受入人数目標19名を上回る22名を達成した。南山大学での短期日本語集中コース受講後に上智大学へ移動して専門科目を学ぶ国内マルチキャンパスの取り組みが浸透し、14名が参加した。日本語集中コースでは昨年度より更に充実した複数機関でのインターンシップの機会を提供し、日本語学習の成果を実地で活用するとともに、異なる文化背景をもつ人々が共に生き、働く場で起こる様々な問題を理解する機会を得た。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

上智大学と南山大学から連携大学13校のうち7大学に交換留学生として10名を派遣した。短期プログラムでは前述の「教皇庁立ハベリアーナ大学スペイン語集中コース」に学生8名を派遣した他、「ペルースタディーツアー“往還する南米日系人”」では上智大学、南山大学、上智大学短期大学部の3大学から学生19名を教皇庁立ペルー・カトリック大学へ派遣した。

○ 外国人留学生の受入

上智大学と南山大学へ連携大学13校のうち12大学から22名を受入れた。うち14名を8月と3月に実施した南山大学の日本語コースに受入れ、これらの学生は修了後上智大学に移動し、自らの専攻分野を中心に学修を行っている。

	H28															
	計画								実績							
	A	Bo	Br	Ch	Co	M	Pa	Pe	A	Bo	Br	Ch	Co	M	Pa	Pe
学生の派遣	2	-	3	1	12	6	-	18	0	-	5	0	9	2	-	21
学生の受入	3	-	3	1	2	7	-	3	2	-	3	1	6	6	-	4

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

平成28年度には、上智大学ではブラジル・コロンビア・チリの連携大学計5校を、南山大学ではメキシコの連携大学1校を訪問し連携強化を図るとともに、現地学生向けに本プログラムの説明会を開催した。さらに、国内連携3大学間の交流により中南米地域との学生交流が促進され、南山大学では3月に中南米連携大学13大学のうち南山大学と協定未締結であったコロンビア1大学と交換留学協定締結を実現し、アルゼンチンの協定未締結校も訪問して協議を進めた。



〈3月4日 国際協働教育評価協力者会議〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

上智大学及び南山大学は専従の嘱託職員を各1名、南山大学は加えて特任講師1名を継続雇用し、学生対応や国内外連携大学との連絡調整、協定校への出張など準備にかかる業務全般を担うことで、プログラムの運営体制を確立することができた。南山大学では上記日本語集中コース専従の特任講師を継続雇用することで、留学生に対しきめ細かな日本語教育および指導体制を確立できた。また上智大学において、受入・派遣学生共通科目「人の移動と共生」、上智大学及び南山大学において「日本・ラテンアメリカ比較演習」の科目を新設し、受入・派遣両方の学生同士が継続的な交流を促進する仕組みを構築した。さらにインターンシップを実施し、必須としている受入留学生だけでなく派遣予定・派遣中の日本人学生に対してもインターンシップの機会を提供した。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況

情報の公開、成果の普及

本事業に関わる特設ウェブサイトプログラム参加者の体験談と留学生によるプロモーションビデオを作成し、事業の目的・内容等の詳細情報を広く公開した。上智大学の特設開講科目「人の移動と共生」では、学外者の受講も広く受入れるべく、ウェブサイトや外部メーリングリストでの積極的な情宣活動を行った。また、10月27日には在京のメキシコ・コロンビア・チリ・ペルー各大使館の協力を得て、「太平洋同盟創立5周年記念シンポジウム」を上智大学で開催し、各国大使及び大使代理による中南米留学の魅力についての講演を行った。

■ 特記すべき事項等

3月4日に外部有識者を招いて、「国際協働教育評価協力者会議」を開催し、事業の成果を評価するとともに改善点と継続的発展のための助言を得た。高等教育の質保証の専門家、国際機関や民間企業で中南米に関わる専門家とともにプログラム成果の振り返り、プログラム運営の課題や継続的発展について議論を深めることができた。また、「インターンシップ協議会」を同日開催し、インターンシップ受入協力機関関係者を招き、プログラムの振り返りを行い、次年度以降の課題について協議した。両会議とも、外部有識者や協力機関関係者にプログラムを客観的に評価してもらうことで、今後の事業の改善につなげる知見を得た。

3. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

【事業の名称】人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム
(選定年度27年度・主たる交流先(中南米))

■ 交流プログラムの実施状況



〈日本語集中コース〉

平成29年度は構想調査の計画数を上回る派遣・受入学生の交流を実現した。8月に実施した教皇庁立ハベリアーナ大学でのスペイン語集中コースには上智大学、南山大学から計11名が参加し、初の試みとしてハベリアーナ大学教職員宅へのホームステイ形式で滞在した。参加学生は学内外でスペイン語運用能力の向上の機会を得、コロンビア文化への理解・関心を深めた。受入学生については、南山大学での短期日本語集中コース受講後に上智大学へ移動し専門科目を学ぶ国内マルチキャンパスのプログラムに18名が参加した。受入学生は日本語集中コースで生活に必要な最小限の日本語や文化・慣習を学び、その後の生活を順調に進め、中南米と日本の関係について授業で理解を深めた後、複数企業・機関での訪問や活動を通して、実地で体験し理解する機会を得た。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

上智大学と南山大学から連携大学に計画の48名に対して53名を派遣した(長期留学18名、短期留学35名)。国内連携大学合同の学生派遣プログラムでは、参加学生間で切磋琢磨と学びあいによる好影響が現れている。前述の「教皇庁立ハベリアーナ大学スペイン語集中コース」に昨年度参加した学生のうち、2名が長期留学を決意、平成29年度交換留学生として留学しており、短期プログラム参加が長期留学への動機付けとなっている。

○ 外国人学生の受入

上智大学と南山大学へ連携大学から計画の25名に対して26名を受入れた(長期留学25名、短期留学1名)。長期留學生のうち18名は8月と3月に実施した南山大学の日本語集中コースに受入れ、コース修了後上智大学で自らの専攻分野を中心に学修を行った。他、1名は上智大学に直接留学し、6名は南山大学の外国人留学生別科で学修した。

〈中南米版〉

	H29															
	計画								実績							
	A	Bo	Br	Ch	Co	M	Pa	Pe	A	Bo	Br	Ch	Co	M	Pa	Pe
学生の派遣	2		6	1	13	7		19	0		4	3	13	5		28
学生の受入	3		4	1	5	9		3	4		2	1	8	8		3

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

南山大学では、事業開始当初はコンソーシアム連携校として上智大学とのみ協定締結していた教皇庁立ハベリアーナ大学、コルドバ・カトリック大学、チリ・カトリック大学と交換留学協定を締結した。このことは、本事業による日本国内コンソーシアムが日本の大学の国際化に資した事例になったと考える。中南米連携校については、中間評価結果共有と今後の協議を目的に13大学のうち6大学から担当者を招聘し、担当者が一同に会するスタッフミーティングを3月に開催した。



〈平成29年12月 留学報告会〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

円滑なプログラム運営のために、国内連携3大学をテレビ会議システムで繋ぎ、定期的に運営協議会を開催した。南山大学では上記日本語集中コースにおいてTAを配置することで、留学生に対しきめ細かな日本語教育を行った。

受入学生に必須としているインターンシップでは、上智短大が秦野市の日系人コミュニティに対して行うサービスラーニング活動への参加を新たに実施し、留学生が様々な視点から日本と中南米の繋がりについて学ぶ機会を提供した。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

昨年度に引き続き、プログラム参加者の体験談と留学経験者によるプロモーションビデオを作成し、本事業ウェブサイトで広く発信したほか、短期プログラムおよび留学生報告会の報告書冊子を制作した。また、上智大学の特設開講科目「人の移動と共生」は、広く成果を共有すべく授業をオープンコースウェアで一般に公開した。

■ 特記すべき事項等

3月8日に外部有識者を招いて、「国際協働教育評価協力者会議」を開催し、事業の成果を客観的に評価するとともに、プログラム運営の課題や継続的発展について議論を深めることができた。また、同日に受入協力機関関係者を招いて開催した「インターンシップ協議会」では、プログラムの振り返りを行い、次年度以降の課題について協議した。両会議と南山大学での日本語集中コースは、同時期に開催した「中南米連携校スタッフミーティング」に参加した中南米連携校6大学からの担当者も見学し、プログラムの実際の運営について理解を深めた。また、両会議で得た知見から、今後の事業の運営に関わる意見交換も行うことができた。

その他、12月7日に国内連携3大学をテレビ会議で繋いだ「LAP留学生報告会」を実施し、派遣・受入学生が留学により得た経験を発表し、留学の振りかえりの場および学生の交流の場として成果を共有した。

4. 取組内容の進捗状況(平成30年度)

【事業の名称】人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム
(選定年度27年度・主たる交流先(中南米))

■ 交流プログラムの実施状況



〈日本語集中コース・日本人学生との交流授業〉

平成30年度は構想調書の計画数を上回る学生受入および概ね計画どおりの学生派遣を実現した。コロンビア社会の理解深化とスペイン語能力・文化理解力向上を目的とした教皇庁立ハベリアーナ大学スペイン語集中コースは、参加した学生から次年度の中南米への長期留学を決意する学生が毎年出ており、本年度も参加者のうち2名が次年度交換留学に進んだ。受入学生については、南山大学での短期日本語集中コース受講後に上智大学へ移動し専門科目を学ぶ国内マルチキャンパスのプログラムが連携校の間でも定着した。日本語集中コースへの参加は短期間で日本語・日本文化の基礎を学べるという点だけではなく、共に学ぶ中南米諸国の学生間で横の繋がりができることでも高い満足度を得ている。派遣・受入学生ともインターンシップを通して、両地域を繋ぐ人材として必要な資質について気づきを得た。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

上智大学と南山大学から連携大学に計画の53名に対して51名を派遣した(長期留学21名、短期留学30名)。長期派遣では連携13大学のうち12大学への学生派遣を実現し、長期派遣学生数は昨年度対比3名増加した。国内連携大学合同の学生派遣プログラムでは、4回目となるペルー・スタディツアーと、実施3回目となった教皇庁立ハベリアーナ大学でのスペイン語集中コースに計画を上回る人数の学生を派遣した。

○ 外国人学生の受入

上智大学と南山大学へ連携大学から計画の26名に対して29名を受け入れた(長期留学29名)。南山大学での日本語集中コースを受講後に上智大学へ移動し正規課程において専門科目を学ぶ、マルチキャンパス受入モデルが確立し、昨年の18名を上回る21名が参加した。また、事業開始より連携13大学全てから学生の受入れを実現した。

〈中南米版〉

	H30															
	計画								実績							
	A	Bo	Br	Ch	Co	M	Pa	Pe	A	Bo	Br	Ch	Co	M	Pa	Pe
学生の派遣	2		6	1	14	10		20	4		4	1	17	4		21
学生の受入	2		4	1	6	10		3	1		3	2	11	10		2

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

次年度が補助事業最終年度となることを受け、上智大学および南山大学にてメキシコ・コロンビア(上智)、ブラジル(南山)の連携大学を訪問し、プログラム開発協議会を実施して、これまでの成果の振り返りと今後の継続の可能性について協議を行った。現地を実際に訪問することで、信頼関係が深まった。国内連携大学間では、昨年度に引き続き、テレビ会議システムで繋いだ定期的な運営協議会を開催し、連携体制を強固なものとした。



■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

受入については、日本語集中コースを含めたマルチキャンパスプログラムが本事業専属の特任講師を中心に安定的に稼働し、参加学生からは日本語や日本の生活に慣れることで上智大学での留学生生活をスムーズにスタートできると評価を受けている。また、中南米と関係がある企業でのインターンシップにより日本と中南米との繋がりを知ることができた。派遣学生は、日本語教育機関での就業型インターンシップ、日系企業での訪問型インターンシップに参加した。就業型では、長期間にわたって講義の補助を行うなど実践的な業務を経験し、中南米の実情を深く理解することができた。

(3月 3大学合同実施「ペルー・スタディツアー」)

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

南山大学では、構想調書では中南米連携大学13大学のうち4大学との協定締結を計画していたが、本事業を通じて新たに3大学とも追加で協定締結し、7大学との連携を実現した。加えて、本年度は新たに1大学と協定を開始している。

情報公開、成果の普及については、国内連携3大学をテレビ会議で繋いだ「LAP留学生報告会」を学内外に公開し、派遣・受入学生が成果を発表する様子を広く発信した。発表者の報告は報告書冊子にもまとめている。その他、主に中南米学生への情宣としてプロモーション動画を作成し、本事業ウェブサイトで発信した。

■ 特記すべき事項等

3月8日に外部有識者を招いて、「国際協働教育評価協力者会議」を開催し、事業の成果を客観的に評価するとともに、補助事業最終年度に向けて残る課題の整理や継続的発展について多くの知見を得ることができた。また、同日に受入協力機関関係者を招いて開催した「インターンシップ協議会」では、プログラムの振り返りを行い、同様に最終年度に改善すべき課題について協議した。

その他、12月に南山大学にてコロンビア・ウィークを開催し、公開講演会や、本イベントの一環として「LAP留学生報告会」を実施した。これらのイベントを通して多くの学生が次年度のプログラムへの参加を検討するきっかけとなった。

5. 取組内容の進捗状況(令和元年度)

【事業の名称】人の移動と共生における調和と人間の尊厳を追求する課題解決型の教育交流プログラム
(選定年度27年度・主たる交流先(中南米))

交流プログラムの実施状況



〈3月 日本語集中コース〉

本事業最終年度となる令和元年度は、構想調書の計画数を上回る学生受入および学生派遣を実現した。また、5年間の学生受入・派遣の合計数は、計画数を上回る数値となった。受入については、南山大学での短期日本語集中コース受講後に上智大学へ移動し専門科目を学ぶ、国内マルチキャンパスのプログラムが確固たるものとして定着した。学生は基礎的な日本語を修得し、日本社会についての理解を深めたことで、上智大学での留学生生活を円滑に開始することができ、専門分野における留学成果向上に繋がった。派遣・受入学生とも学生間交流やインターンシップを通して、自身のアイデンティティを再考し、両地域を繋ぐ人材として必要な資質について気づきを得た。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

上智大学と南山大学から連携大学に当初計画の58名に対して61名を派遣した(長期留学21名、短期留学40名)。長期留学は、プログラム開始直後の2016年度に比べ2倍となる学生派遣数を実現、本事業が学生の中南米留学を後押ししたことが裏付けられた。国内連携大学合同の短期派遣プログラムでは、ペルー・スタディツアーと教皇庁立ハベリアーナ大学でのスペイン語集中コースに計画を上回る人数の学生を派遣し、特にハベリアーナ大学スペイン語集中コースには過去最多の17名を派遣した。

○ 外国人学生の受入

上智大学と南山大学には、連携大学から当初計画の26名に対して35名を受け入れた(長期留学34名)。南山大学での日本語集中コースを受講後に、上智大学へ移動し、正規課程において専門科目を学ぶ、マルチキャンパス受入プログラムには、昨年の21名を上回る24名が参加し、補助事業期間全体では計81名の学生が参加した。

<中南米版>

	R1															
	計画								実績							
	A	Bo	Br	Ch	Co	M	Pa	Pe	A	Bo	Br	Ch	Co	M	Pa	Pe
学生の派遣	3		6	3	16	10		20	3		1	2	21	11		23
学生の受入	3		4	2	5	9		3	2		2	1	9	19		2

質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

12月に総括シンポジウムを開催し、中南米側連携校のうち3校(教皇庁立ハベリアーナ大学、メキシコ自治工科大学、ブラジリア大学)から招聘した教員と、国際協働教育評価協力者会議の評価協力者とともに、成果の振り返りと今後の展開について議論した。国内連携大学間では、テレビ会議システムで繋いだ定期的な運営協議会を継続開催し、補助事業期間終了後の事業継続の可能性について協議した。



〈12月6日 総括シンポジウム〉

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

受入については、補助事業期間を通して築いた学生交流実績と国内連携大学間の信頼を基盤に、日本語集中コースを含めたマルチキャンパスプログラムの継承プログラムとして、中南米に限らず上智大学で受入れる交換留学生向けに、2020年度から南山大学でLate August Pre-sessional日本語集中コースを立ち上げることを決定した。

受入学生は、中南米と関係がある企業でのインターンシップやサービスマーケティングへの参加により、日本と中南米との繋がりを知ることができた。派遣学生は、日本語教育機関や国際機関での実践的な就業型インターンシップ、日系企業での訪問型インターンシップに参加し、中南米の実情を深く理解することができた。

事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

南山大学においては、構想調書では中南米連携大学13大学のうち4大学との協定締結を計画していたが、本事業を通じて最終的に9大学との連携を実現した。加えて、本事業以外にも中南米の大学2校と新規協定締結した。上智大学でも、ウルグアイなどこれまで協定校のなかった中南米の国の大学とも新たに協定締結している。

情報公開、成果の普及については、国内連携3大学をテレビ会議で繋いだ「LAP留学生報告会」の内容を冊子にまとめた他、総括シンポジウムの記録も含めた本事業の総括報告書も作成した。これらは今後広く配布する予定である。

特記すべき事項等

12月6日に外部有識者を招いて、「国際協働教育評価協力者会議」を開催し、令和元年度の事業の成果だけでなく、補助事業期間全体の成果を客観的に評価し、得た知見を総括報告書作成に生かすことができた。また、前日に受入協力機関関係者を招いて開催した「インターンシップ協議会」では、補助事業期間後の協力関係についても意見交換することができた。12月6日の午後には、上智大学で総括シンポジウムを開催し、本事業の枠組で留学した学生のパネルディスカッションと中南米側連携校から招聘した教員との意見交換を通して、成果の振り返りと今後の展望について様々な知見を得ることができた。今後の事業継続に向けて、活かしていく予定である。